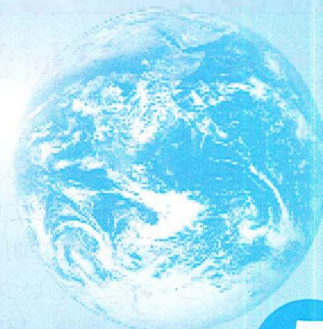


Glocal Tenri



5

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.23 No.5 May 2022

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
「型」について
／永尾 教昭 1
- ・ 社会福祉からみる現代社会—天理教の社会福祉活動に向けて— (2)
現代社会とは何か—3つの現象から—
／深谷 弘和 2
- ・ 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (7)
台湾伝道の黎明
／山西 弘朗 3
- ・ イスラームから見た世界 (20)
イスラームから見た死②—死者への弔い—
／澤井 真 4
- ・ 天理参考館から (28)
端午の節句に破邪を願う
／幡鎌 真理 5
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教えの伝播— (21)
6. コロンビアの日常2
／清水 直太郎 6
- ・ おやさと研究所ニュース 7
2021年度おやさと研究所特別講座「教学と現代」
「澤井義次・天理大学名誉教授の最終講義」報告 (澤井義次) / 第346回研究報告会 / 2022年度公開教学講座のご案内 / 2021年度おやさと研究所特別講座「教学と現代」 / 2021年度公開教学講座

巻頭言

「型」について

おやさと研究所長 永尾教昭 Noriaki Nagao

世界中でコロナ禍が収束したとはまだ到底言えないが、徐々に社会活動が正常化しつつある。スポーツの世界も同様で、各競技会は少しずつ観客も入れて行われるようになってきた。

ところで相撲をテレビで観戦していると、コロナ禍以降取り組み前の所作が少し変化した。力士は、取り組み前に必ず「力水」というのを口にする。桶に入れられた水を、直前の取り組みで勝った力士（験担ぎのため負けた力士はやらない）が柄杓ですくい、それを次の力士に渡す。渡された力士はそれを口に含み、口元に紙を当てて吐き出す。コロナ禍以降感染の恐れがあるので、よく見ると水を口に含んで吐き出すように見せかけて、実際には柄杓には水が入っていない。

水が入っていないのなら、この所作はやめれば良いとも思うがやめない。それは、相撲が「型」を重視するからだろう。ほかにもコロナ禍とは関係ないが、例えば微妙な勝負の場合、土俵下にいる羽織袴姿の5人の審判員が集まり勝ち負けを協議する。実際には、ビデオ室でスロービデオを再生し判断して、それを審判長にイヤホンで伝え決定されることがほとんどだが、この「物言い」と言われるシステムは決してやめない。これも型を重視し、それを伝統として保持しているのである。考えてみれば、力士の鬘や行司の衣装など、すべて時代に即していないが存続している。筆者などは、そういう型を美しく感じる。

そもそも相撲はスポーツではなく神事だと言われる。初日前には土俵の土の中に供え物がされ、祝詞が読まれる。横綱は通常神域を表す注連縄を腰に巻き付けている。相撲が型を重視するのも、相撲全体が言わば一つの宗教的儀礼でもあるからだろう。

一般的に、宗教にセレモニーは欠かせ

ない。洋の東西を問わず、どの宗教もその型を守っている。キリスト教のサクラメントなどの儀式も宗派ごとに長年同じやり方が踏襲されている。仏教の勤行もそうだろう。筆者はゾロアスター教の神事も見学したことがある。その意味するところはわからないが、やはり型がある。天理教もまったく同様だ。つとめに着用する衣服やその直前の祭儀の仕方や祭具も同じものが続けられている。

ところで宗教で用いる祭具などはもともと特殊なものだったわけではなく、一般的なものであった場合も多い。天理教で言えば円座（わらで作った敷物）も酒を供えるときの瓢箪型の容器（神酒すず）も、かつては一般でも用いる日常の道具であった。しかし時代とともに一般社会が機能性などを求めて変化していったのに対して、宗教界は型を重んじるがゆえに変えず、結果的に特殊なものになっていったのだと思う。

ただ筆者は現実の海外布教生活上で、布教を進めるに際して教団内の様々なきたりの中のどこまで、いわば型として墨守していくべきかは常に検討されなければいけないと強く思った。なぜならば、外国の場合、それらは過去にも決して日常的なものであったわけではなく、異質なものが入ってくることになり、その国の人には強烈な違和感が拭えないし、現実問題として調達も難しい。

直接つとめに使う神具、服装などは国によって変えることには極めて慎重であるべきだと思うが、もう少し敷衍して儀式に使う円座は椅子でも良いか、参拝場の装飾である御簾は品の良いカーテンではまずいかなど検討を続けていくべきだろう。さらに対象を広げて、これも一つの型として残っていると思うのだが、事務的な部分の習慣、例えば郵紙、墨書による願書類なども考えていかねばならないだろう。

現代社会とは何か—3つの現象から—

天理大学人間学部講師
深谷 弘和 Hirokazu Fukaya

「現代社会」って、いつからですか？

筆者は、大学に入学したばかりの1年生を対象にした「現代社会と福祉」という授業を担当している。その授業では、最初に「現代社会」の特徴について説明し、学生と意見交換をおこなうが、「現代」といったとき、いつの時代を指すのだろうか。

本連載では、先進諸国が戦後、経験した高度経済成長がピークを迎え、低成長への入り口となるオイルショックがあった1970年代以降を「現代社会」と捉えておく。その上で「現代社会」がどのような社会なのかを論じていくことにする。今回は、グローバル化、リスク化、個人化という3つの現象から「現代社会とは何か」という問いに応答してみよう。

「グローバル化」した現代社会

交通網の発展やインターネットの普及によって、資本、情報、労働力は、国境を越えて地球規模で移動することが可能となった。いわゆる「グローバル化」である。資本や労働力が国境を越えて自由な移動が可能になると、戦後の社会福祉を支えた福祉国家体制は、大きな揺らぎを経験することになった。福祉国家とは、ナショナル・ミニマムを保障する体制、つまり、国民一人ひとりの最低限度の生活を保障する生存権を守る仕組みを医療、年金、社会福祉といった法制度により整えていく国家のことである。

グローバル化が進むと、なぜ、福祉国家が揺らぐことになるのか。グローバル化により、各企業は、海外との競争の中で、より安い賃金での労働力を求めて、海外に工場を建設したり、移転させたりする。そのことにより、国内の雇用市場は不安定なものとなる。特に日本の福祉国家は、終身雇用・年功序列の雇用慣行と、「男性は仕事、女性は家事・育児」という近代家族モデルに支えられていたため、雇用環境が不安定になると、福祉国家が揺らぎを経験するのである。男性の雇用が不安定になることで、男性が家族を扶養することを前提とした賃金体形が崩壊し、補填のため女性が働くようになると、少子高齢化の流れと合わせて、女性が担ってきた子育てや介護といったケア役割を、社会化する必要がある。結果的に、企業からの法人税、個人からの所得税といった税収のベースが不安定になると共に、社会福祉のニーズは多様化、複雑化することで、従来の福祉国家の機能は、維持が困難になってくるのである。実際に、日本の国家予算に占める社会保障費の割合は、年々高まってきている。

現代社会と「リスク化」

次に「リスク化」という現象をみていきたい。福祉国家において、社会福祉の対象となるのは、主に男性基幹労働者であった。障害や疾病によって失業し、貧困になる対象は、主に男性が想定されていた。しかしながら、先述したようにグローバル化により女性が社会進出することによって、女性も失業や貧困のリスクが生じることとなった。また、規制緩和が進み、非正規雇用などの不安定な雇用が増えることで、働いても働いても収入を安定させることができないワーキングプアや、競争の激しい労働環境に対応することができず、個人の経済的な自立が遅れることで、「パラサイト・シングル」と呼ばれる単身者が

出てきたり、未婚率が高まることで、福祉国家が想定していた「家族」というセーフティネットが機能しなくなってくる。さらには、リストラが進むことにより、能力主義や成果主義の風潮が強まると、職場でのストレスを背景とした自殺、各種の依存症、家庭内暴力、虐待といった新たなリスクも生じるようになる。誰しもが、「明日は我が身」で、社会福祉の対象となる時代。それがリスク化である。

また、個人の生活レベルでのリスクの高まりのみならず、工業化の進展は、地球規模での環境問題などのリスクも高めることとなった。人々の豊かな生活の代償として、森林の伐採や大気汚染、地球温暖化や海面上昇といったリスクが高まった。こうしたリスクは、国境を越えて、人々の生活に影響を与えるが、国際的な基準を整えるには、国家間の調整が必要であり、決して簡単なものではない。

「個人化」する現代社会

最後に「個人化」をみてみよう。戦後に整備された福祉国家体制は、生存権や教育権といった社会権を保障する仕組みづくりであった。一人ひとりの権利が保障される仕組みが整えられるようになると、皮肉なことだが、その権利が他者によって保障されているという互酬性を意識することが、かえって難しくなってしまう。「自分は税金を納めているのに、十分な保障を受けることができないのではないか」とか、「自分は懸命に働いて、納税しているにも関わらず、生活保護や年金で生活している人がいるのは、ずるい」といった利己的な考えが強まっていく。これが「個人化」と呼ばれる現象である。加えて、生活水準が高まり、教育機会が保障されるようになると、生活の豊かさは自分次第であるという意識が高まり、「生活が不安定なのは、自分の努力不足だ」という自己責任の意識も強めることとなる。個人化の進行は、「おたがいさま」の互酬性の意識を低下させ、格差が拡大し分断が強まることにもつながっている。

求められる新時代の社会福祉

ここまで、現代社会の特徴をグローバル化、リスク化、個人化の3つの現象から説明した。グローバル化によって、人びとの生活基盤である労働や家族のあり方が変化し、全ての人にリスクが身近なものとなり、社会福祉のニーズは多様化、複雑化している。さらに、個人化によって、互酬性や連帯意識を持つことが困難になると共に、新たな社会づくりに向けた合意形成もまた困難となっている。近年の格差や分断の背景には、福祉国家体制の成熟と、揺らぎがあることを踏まえ、新たに人々がつながり、支え合う仕組みをどのように構想すべきなのか、議論を深めていく必要がある。例えば、整備された協同組合の仕組みなどは、行政や企業に変わる社会福祉の担い手として注目されてきている。地域の社会資源を市民の手で管理し、運営する仕組みである。また、こうしたコミュニティの再生をめぐることは、宗教の新たな役割を模索しようとする実践や研究もある。目まぐるしく変化する「現代社会」の特徴を多面的に捉え、新時代の社会福祉を構想することが求められている。

台湾伝道の黎明

台湾伝道の黎明

明治 28 (1895) 年に清国から日本に割譲された台湾は、日本の初めての植民地となったことで、日本内地から台湾へ渡る人々が増加していくこととなった。このような人々の移動に伴って、台湾における伝道も始められることになる。この台湾伝道の黎明において、いくつかの事例を紹介しながら、当時の伝道方法について考えてみたい。

海外伝道の進め方については、組織的伝道と個人的伝道に大きく分けることができる。組織的伝道とは、大教会や比較的規模の大きな教会が、計画を立てながら、複数の布教師を派遣したり、経済的支援をして伝道を進める方法である。この場合、現地での伝道方法に関する知識や情報が共有されたり、伝道を進めるにあたって役割を分担するなどによって効率的に伝道が展開されることが見込まれる。これに対して、個人的伝道は、基本的には布教師が個人や家族だけで伝道を進める方法である。この場合、経済的基盤の脆弱性から、生計を立てるといふ問題に直面しながら地道な伝道を一步一步進めることとなる。この組織的伝道と個人的伝道は実際には必ずしもはっきりと区分できるわけではないが、それぞれの教会による伝道方法や発展する形を特徴づけるものとなる。

組織的伝道

組織的伝道として代表的なものに、山名大教会による伝道があげられる。初代会長諸井国三郎が率いたもので、本稿ではこれまで『おさしづ』における海外伝道において取り上げてきた。この組織的伝道が計画された背景には、当時の山名大教会を取り巻く状況があった。山名大教会は明治 26 (1893) 年から東北地方への布教を展開し、明治 28 (1895) 年までに 27ヶ所の教会を設立するという目覚ましい発展を見せていた。しかし、日清戦争後の深刻な不況と明治 29 (1896) 年 6 月の三陸津波、さらに凶作にも見舞われた。これに追い打ちをかけるように同年 4 月には内務省によっていわゆる「秘密訓令」が發布され、天理教への厳しい取り締まりが進められることとなり、山名大教会の布教の最前線として発展していた東北地方での布教活動が一気に停滞することとなった。

このような状況に直面した諸井国三郎は、日本の新しい領土となった台湾での布教に希望をかけた。天理教の教えがまだ伝えられていない台湾なら、天理教を伝え多くの信者を獲得することができ、さらにそのことが東北での布教の停滞という困難に込められた親神の神意であると悟ったのであろう。そこで、まず布教活動を展開するための資金を集めることとなり、山名大教会の婦人が中心となって「大日本神道天理山名婦人協会」を創立し、この会員から毎年会費として出金してもらい、布教を展開するための長期的で安定的な経済基盤を作ることとなった。ちょうどこの時期に、台湾で殖産、土木事業を展開したいという人が 3 人現れ、この人たちの台湾での人脈を利用して布教を展開することも一つの方法だと考え、布教と殖産と土木事

業の三つを成り立たせることから「鼎立社」という株式会社のようなものを設立し、集めた資金を出資金として活用することとした。明治 30 (1897) 年、先遣隊として一條源次郎ほか 2 人が台中で仮住まいとして台湾人の家屋を借り受け準備を整えて、諸井国三郎はじめ 6 人を台湾北部の基隆港で出迎えた。そこから諸井国三郎だけは台北へ向かい、当時の民政長官水野遵を総督府にたずね、天理教の布教と殖産興業の了解を求めた。さらに台北から台中へ向かう途中、新竹県で下車し、桜井勉知事をたずね、同様の了解を求め、試作地の無料借用の内諾を得た。同年 11 月には工業部、殖産部、煙草事業からなる「鼎立社」の看板を掲げた事務所が完成し、5 反 (1,500 坪) の土地を無料借地して、杉、松、檜、桜などを植林した。また煙草の栽培にも着手した。しかし、請負業は信用を得るに至ったものの、殖産興業は思い通りに進まず、特に煙草栽培事業は大きな損失を出し、当初事業を持ち掛けてきた 3 人は事業に見切りをつけて内地へ帰ってしまった。諸井国三郎は、この 3 つの事業を引き受けなければならなくなり、植林に力を入れたが、成果は芳しくなく、現地の風土病であるマラリアにかかる者も出て、資金難に陥り、事業は困難な状況となった。

さて、天理教の布教活動について見れば、諸井国三郎も現地の実情を見聞し、信者はいなくとも、先にその信仰の目標や信者が集まることが建物が必要であると感じていた。明治 30 (1897) 年 9 月 12 日におさしづを伺い、教会設立のお許しを得た。そこで、諸井国三郎は一條源次郎に台中布教専務を命じ、翌年 4 月に地方庁の認可を受け、5 月 7 日に鎮座祭を行い、台中教会を設立することとなった。これを機に鼎立社は解散し、一條たちは台中付近の台湾人の村々を巡り布教に奔走した。彼とともに布教していた高室清助は台北布教へ向かい、新しく渡台した松原織蔵は新竹での布教を命じられた。このあと、明治 33 (1900) 年 6 月に高室清助を担任とした台北教会を設立、明治 37 (1904) 年 7 月に守屋武治を担任とした台南布教所の設置につながっていく。高室清助は明治 30 (1897) 年 9 月に渡台し、諸井国三郎の指導の下、各地で奔走していた。また、守屋武治は明治 31 (1898) 年 7 月に渡台し、台中、台北で布教に従事した後、明治 36 (1903) 年から台南において布教を始めていた。

このように黎明期における山名大教会の組織的伝道は、当初の殖産事業は頓挫したものの、大教会長が率いて布教展開することで人材面でも資金面でも、個人的布教とは比較にならないほど条件が恵まれていた。そのおかげで、台湾で初めての教会を設立しただけでなく、その教会を布教活動の拠点としながら、各地へ布教師を派遣することもできた。そして、次第に広範囲にわたって布教を展開することで、台湾における天理教伝道の礎を築くこととなったのである。

[参考文献]

高野友治『天理教伝道史』10、天理道友社、1975 年。

イスラームから見た死②—死者への弔い—

おやさと研究所講師
澤井 真 Makoto Sawai

土葬とイスラーム

イスラームでは、死後出来るだけ早く埋葬するのが原則である。その理由は、中東では季節によっては急激に死体の腐敗が進むからだと考えられる。また、火葬ではなく土葬を行うことも原則である。ユダヤ・キリスト教的な影響の下、火で遺体を焼くことは、神による罰として、火獄（地獄）へ落とされた者が受ける業火を連想させるからであろう。

今日、日本の葬式は99%以上が火葬である。そのため、墓地での納骨も火葬を前提としている。そのため、ムスリムは土葬が可能な埋葬地を探しておかなければならない。日本では、数カ所でムスリム墓地が存在しており土葬が可能であるが、墓地不足は深刻である。というのも、ムスリム墓地から遠い場所に住んでいるムスリムにとっては、遺体の移送に時間とコストがかかるからである。この課題を克服するべく、全国各地のムスリム・コミュニティが中心となってムスリム墓地の建設が進められている。しかしながら、衛生上の観点から、ムスリム墓地の候補地になっている地域住民が墓地受入れに反対するなど、各地で問題となっている。

ムスリムのための葬儀ビジネス

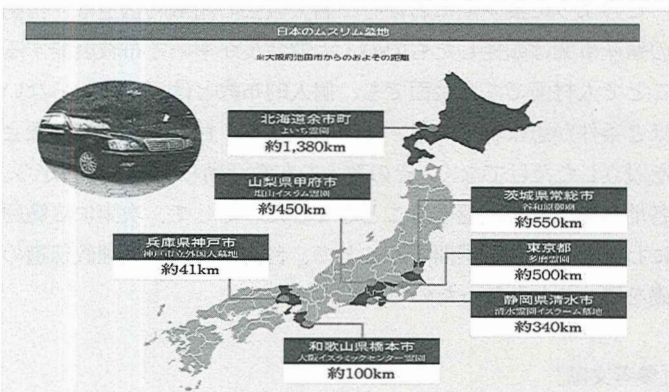
大阪府池田市にある株式会社北大阪セレモニーでは、ムスリムのための葬儀向けのビジネスを展開している。日本に滞在するムスリムの多くが外国人であることを踏まえるとき、ムスリム向けのこうしたサービスは今後ますます需要が増えると考えられる。というのも、身内を亡くした際に自ら葬儀の段取りを行うのは、たとえ日本人であっても戸惑うことが多いからである。

そのため、北大阪セレモニーでは、病院から遺体をモスクに移送するとともに、モスクやアラビア語で「ジャーナーザ」(janāzah) と呼ばれる葬儀を取り仕切るイマームを手配し、葬儀後はムスリム墓地へと再び遺体を移送するサービスを行っている⁽¹⁾。さらに、本国で埋葬したい遺族のために空輸の手続きも代行している。

ムスリムの葬儀の手順

死に接したとき、イスラームでは出来るだけ大声を挙げて泣いたり叫んだりしないように教えられている。こうした死への悲しみはイスラーム以前に行われていたことであって、イスラームによる教えではないからだという。

ウマルによると、預言者は「死者は、人がそのために泣き叫ぶことのゆえに、墓の中で罰を受けるであろう」と言っ



日本にあるムスリム墓地 (北大阪セレモニーのホームページより)

⁽²⁾ た。

アブド・アッラーによると、預言者は「我々の中に、悲しみの現われとして頬を打ち、衣を裂き、イスラーム以前の時代のように叫ぶ者はいない」と言った⁽³⁾。

日本でも遺体を湯灌するように、イスラームでも遺体を洗体する作業がある。洗体の方法は礼拝のための浄めの手順と同様で、洗体の回数は奇数回である。その後、多くは白い布で遺体を包むことになっており、その衣はマッカ巡礼に赴いた者であれば、巡礼の際に用いた白衣を用いる。



洗体のための部屋
2019年セネガル 筆者撮影

葬儀の礼拝では、葬送を司るイマームが遺体の前に立ち、イマームの後ろに葬儀の参列者が立つ。イマームは「タクビール」(takbir) と呼ばれる「アッラーは偉大なり」という文言を、4回唱える。その際に、彼らは頭を地面につけて跪拝(サジダ)をすることはない。その理由として考えられるのは、彼らがもし礼拝と同様の所作をしてしまうと、彼らの礼拝対象が神なのか遺体なのかが判別できないからであろう⁽⁴⁾。

埋葬の際には、遺体の頭をマッカの方角に向け、右半身を下にして埋葬される。右半身を下にする理由の一つとして、預言者ムハンマドが推奨していた就寝時の身体の向きが関係していると思われる。また、葬儀では遺体は棺に入れられているが、埋葬においては棺から出して埋葬される。

突然始まった葬儀

筆者は、エジプトでモスクでの調査中に突然始まった葬儀を偶然に観察したことがある。モスク内に多くの人々が参加する集会の途



葬儀に参列する人々
2017年エジプト 筆者撮影

中に、棺が突然運び込まれ、集会は一時中断した。すると集会の参加者たちは遺体の後方に立ち、名前も知らない死者の安寧を祈っていた。わずか3分の葬儀であった。「葬列を見たときは、それが何であれ、立ち上がりなさい」という預言者ムハンマドの言葉には、死者に対する最大限の弔いの態度が込められている⁽⁵⁾。

[註]

- (1) 株式会社北大阪セレモニー「イスラーム教の葬儀サポート」(<https://kitaosakaceremony.jp/islam.html>2022年4月1日アクセス)。
- (2) ブハーリー(牧野信也訳)『ハディース—イスラーム伝承集成』第3巻、中央公論新社、1993年、346頁。
- (3) 同上、347頁。
- (4) ただし、モスクの中には、人々が跪拝する先やモスク中央に廟が安置されていることも多い。
- (5) ブハーリー(牧野信也訳)『ハディース—イスラーム伝承集成』第3巻、351頁。

端午の節句に破邪を願う

天理参考館学芸員

幡鎌 真理 Mari Hatakama

また爽やかな五月が巡ってくる。新年度が始まって少し落ち着き、寒くも暑くもなく、一年の半ばまでまだ少し猶予があるので気持ちに焦りもない。その絶妙な時節に端午の節句がある。しかし元々の端午の節句は、はじめと陰鬱で蒸し暑い梅雨時期の、いかにも流行病が蔓延しそうな「悪月」のものである。端午とは、端^{はじ}めの午^{うま}の日のことで、元来五月に限ったものではなかったが、午と五の音が符合することによる同一視と、中国では月と同数の日が重なる「重日」は吉事を行えば吉事が重なり、凶事を行えば凶事が増幅するというスリリングな日であるため、慎重を期して災厄除去をした。まして疫病が流行りやすいこの時期には、なお一層心を込めて穢れを祓ったのである。そのように腹をくくって悪疫に対処しなければならぬ端午には、上巳（はじめの巳の日）のようにうららかに春めいて潮干狩りを楽しむ穏やかさはない。登場する人形も、上巳に飾る愛らしい白いお顔の雛人形などではなく、険しい顔の鍾馗や、鉞を振り上げた真っ赤な金太郎となるのは当然であろう。

端午の節句を「菖蒲の節句」とも言い換えるが、この季節に繁茂するショウブの、剣に似た葉のかたちや強い香気に破邪の効用を信じたからに他ならない。この場合のショウブは、美しい花を咲かせるアヤメ科のハナショウブではなく、ショウブ科のそれである。花は目立たない。推古天皇19年(611)5月5日に大規模な菖蒲が行われたのは、端午に採取した菖草は効能が高いと考えられていたからであろう。天平19年(747)5月5日には聖武天皇が途絶えていた端午節句を復活させ、騎射を天覧するが、このとき「菖蒲御案^{あやめのつくえ}」、「菖蒲鬘^{あやめのかづら}」、「薬玉^{くすたま}」という記述が『続日本紀』に見える。「菖蒲御案」は菖蒲を乗せて運んだ机のことで、「菖蒲鬘」は菖蒲の髪飾りを指し、「薬玉」は菖草を袋に入れて菖蒲を結び

つけて五色の糸を下げたものである。端午節会では菖蒲鬘を男性は冠に、女性は髪に挿して参列して天皇から薬玉を賜うきまりであったため、菖蒲鬘をつけていなければ誰であろうと宮中に入ることはできなかった。さしずめ、現在のコロナワクチン接種証明書やマスク着用がなければ入場お断りということか。このショウブの絶大なパワーを信じて従う考えは平安時代以降も続き、次第に武家や民間も受け入れるようになった。民間でも菖蒲を屋根に葺く「軒菖蒲^{のきしよぶ}」の風習が広まり、ショウブの力で悪疫が家内に入らないよう、当時としてはお墨付きの感染対策を徹底した。

その後、端午の節句に甲冑飾りや五月人形が登場する端緒としてしばしば引用される記述に、二条良基が作者かと推定されている『増鏡』の建長3年(1251)5月5日条がある。ここに「所々より御かぶとの花、くす玉など、いろいろにおほくまいり。朝餉にて、人々これかれ引きまさぐりなどするに」と書かれている。これは武具としての兜に花を挿したのではなく、おそらく薄い木片や紙で作った兜に花を飾ったものか、もしかしたら御かぶとの花=ショウブそのものだったのではないかと思う。天皇が食事をする朝餉の間で、参内した貴族たちが「これかれ引きまさぐり」、あれこれ手にとって眺めたのであろう。端午に武家の象徴ともいえる甲冑を飾ることは公家社会では未だあり得ず、広く甲冑や人形を飾る五月飾りは江戸時代を待たなくてはならない。

江戸時代になると、ショウブに「破邪」の効用に加えて「尚武」の意味合いを強く投影するようになり、さらにそこに男子誕生の祝意が加えられる。『大猷院殿御実記』寛永19年(1642)5月5日条には「けふ家門諸大名より献ずる菖蒲兜を庖所へかざり。旗十五本。白旗五本。白地御紋の旗五本。家門より献ぜられし旗五本。高矢倉の前にたてられる」とある。文章から壮観な有様が想像でき、後に徳川四代将軍となる家綱の初節句がかくも盛大に祝われたことがわかる。ここでも先述の『増鏡』の「朝餉」と同じように、喫食と関係する「庖所」に飾られている。体内にものを入れることに関係する場所にこそ「破邪」が必要と意識されていたのか興味深い。ともかく、このような五月飾りは将軍家や大名のみならず、この頃すでに庶民の間にも広まっていた。なぜなら、これからわずか6年後の慶安元年(1648)には、端午の兜に立派な蒔絵や金具や糸類を用いてはならないとか、幟旗に絹を使ってはならない等の御触書(禁令を示すもの)が出され、奢侈を戒めているからである。

徳川幕府が公儀の祝日として五節句(人日・上巳・端午・七夕・重陽)を定め、そのなかでも特に端午を重視したのは、ショウブの破邪の力と「尚武」に通じること、さらに何より武家にとって跡継ぎとなる男子誕生と健やかな成長が最大の慶事であったからに他ならない。しかしその願いは庶民とて同じ。非情に襲いかかる悪疫や飢饉に加え、容赦の無い自然災害のなか、わが子はなんとか命をつないで無事に育ててほしい、そして願わくば立身出世をして幸せな生活を送ってほしいという思いは庶民こそ強くあったはずである。そのために武具を飾り、勇猛な歴史上の人物をかたどった人形を飾った。新型コロナウイルスの脅威が続くこの時節、端午の節句に甲冑や人形を飾って災厄を祓い、子どもの幸せを祈念する意味に改めて思いを馳せたい。



鯉の上に金太郎 大正14年 全高38cm
(天理参考館蔵)

奈良の旧家から受贈した端午の飾りの一部で京都製。思慮深い表情で鯉にまたがり周囲を睥睨する様子は、このまま龍門を登りきって天空を翔け巡るのように見える。

6. コロンビアの日常2

ラテンアメリカとコロンビアの警備業界：民間警備機関の概要 その2

ラテンアメリカの治安の悪さについては、公的機関の「警察」にも問題があり、また民間警備業界においても内部の諸事情を指摘することができる。民間警備と対置されるのは公的警備、つまり警察である。治安の悪化によって公的部門の予算は上昇しているが、それに伴う警察の業務内容が伴っていない上に、警察に対する信頼も薄い。

治安のとくに悪い中米のグアテマラ、ホンジュラス、サルバドールの総人口の50%の人たちが犯罪行為を防ぐのに警察は不必要だと考えているという⁽¹⁾。そして、治安の悪化、国家機関の弱体化、(警察への)信頼の失墜などが民間警備を発達させる原因になった。また、ラテンアメリカでは2014年までに、合法的に行動する民間警備員が約160万人、無免許の警備員が200万人に上ると推定されているのである⁽²⁾。

ところが、民間警備会社自体が問題をはらんでいる。質の良いサービスをというよりも、どうやら「儲け」を一番に考えているようである。

グアテマラの警備会社組合の会長は次のように述べている。

違法な会社が正当な会社に悪影響を与えています。警備としての税金を納めないで、直接の利益をあげています。通常、(グアテマラでは)警備費用の月額額は約655ドルですが、違法会社は457ドル～523ドルと格安にしています。また、通信網の不備のため、サービスの質も低い。警備員としての適切な訓練をせず、資格を確認しないということもあります⁽³⁾。

民間警備は、ラテンアメリカではそれほど古くから存在しているわけではなく、比較的新しい「産業」なのである。不況である社会の雇用を増やしており、国家の公共治安部門(警察など)がカバーできなくなっている需要の高まりに対して治安対策を供給しているものだ。

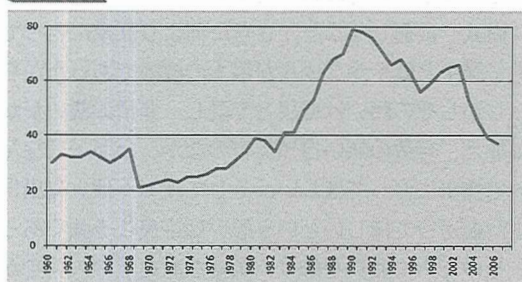
コロンビアの治安と警備

さて、コロンビアにおける治安問題に話を移そう。コロンビアの警備の背景にあるのは、治安の問題である。

まず、警備の必要性を理由づけるコロンビアの治安状況の経緯を手短かに説明する。この40数年の間で一番高い殺人率は1991年における10万人あたり79人である(グラフ1参照)。

コロンビアの暴力(以下バイオレンス)の詳細については、

Gráfico 10. Homicidio tasa por 100.000 habitantes 1960 - 2006



Fuente: Policía Nacional: CIC-DUIN.

グラフ1：1960年～2006年までの10万人に対する殺人率
www.scielo.org.co/scielo.php?script=sci_arttextCpid=S1794-31082008000100005 "La violencia en Colombia: Análisis histórico del homicidio en la segunda mitad del Siglo XX"

ラテンアメリカ研究者にお任せすることにして、歴史的な治安の経緯を紹介し、国民性も考慮し、その関係を考察することにする。

20世紀のバイオレンス

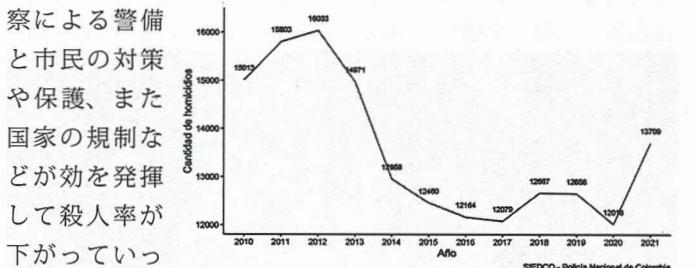
① 1948～1974年：この時期は、コロンビアの「バイオレンス時代 (La Violencia)」と呼ばれる。それは政治社会紛争の時期であると同時に、「国民協定」の時代である。この時代は、2大政党(保守党 Partido Conservador・自由党 Partido Liberal)の政権争いが国内紛争の元となり、1,300万人の国の人口で、実に18万人もの犠牲者が出ている。この内紛は全国に及んだ⁽⁵⁾。

その後、2大政党が交互に政権を取る「国民協定 (Frente Nacional)」時期が1958年～1974年まで続いた。その協定によって治安が一時的に落ち着く。しかし、それもつかのまのことで、結局、「二つだけの政治権力しか認めず、第三・第四政力を排除した負の現象として武装集団、ゲリラが出現し、コロンビアの特徴の一つ《政治的バイオレンス》の常時化の根が作られた⁽⁶⁾。

この時代の後半、つまり60年代あたりからFARC (Fuerza Armada de Revolución Colombia、コロンビア革命軍1964年結成)、ELN (Ejército de Liberación Nacional、民族解放軍1967年結成)、EPL (Ejército Popular de Liberación、コロンビア人民解放軍)も1967年に結成されている。

② 1974～1993年：この時期は、ゲリラが麻薬組織と結び付き、勢力を伸ばした時期でもあり、治安が大幅に悪化した。政府対ゲリラの構図に新たに麻薬組織が加わり、またパラミリ(右翼武装団)も現れ、1990年から1993年にかけては、殺人率は10万人あたり80人に届くまで高くなっていった。

③ 1993～2021年：ゲリラの抗争、犯罪の増加、法令や道徳の欠如などで治安が悪化し、1995年から2003年にかけてのバイオレンスの状況はまたもや厳しい状態となる。だが、警察による警備



グラフ2：2010～2021までの殺人者数
https://www.lasillavacia.com/historias/historias-sillavacia/7-graficas-para-entender-los-homicidios-en-colombia-en-2021/ "7 gráficas para entender los homicidios en Colombia en 2021"

下がっていった(グラフ2参照)。2012年から2017年にかけては、2016年の「平和交渉 Proceso de Paz」により確かに60年続いた武装集団との交渉でゲリラ活動は治まった形にはなっている。しかしながら、ゲリラの残党や他の武装グループは活動を依然続けている。また、2021年4月から6月の国民ストライキでは多数の犠牲者が出て、いまだコロンビアの治安は不安定なままである。(続く)

[註]

- https://revistasumma.com/seguridad-un-desafio-de-primer-orden-en-america-latina/ "Seguridad: un desafío de primer orden en América Latina," Oct 22, 2018 Revista Summa.
- ibid.
- https://repositorio.flacsoandes.edu.ec/bitstream/10469/2717/1/BFLACSO-CS19-03-Betancourt.pdf
- 大文字で書く。1925年～1958年を指している。
- www.scielo.org.co/scielo.php?script=sci_arttextCpid=S1794-31082008000100005 "La violencia en Colombia: Análisis histórico del homicidio en la segunda mitad del Siglo XX."
- ibid.

2021年度おやさと研究所特別講座「教学と現代」
「澤井義次・天理大学名誉教授の最終講義」報告

澤井 義次

2021年度のおやさと研究所特別講座「教学と現代」は、おやさと研究所主催・人間学部宗教学科共催で、澤井義次・天理大学名誉教授の最終講義「生きることの意味とその理解—天理教人間学の地平から—」として、2022年2月25日（金）天理大学ふるさと会館大ホールにおいて開催された。当日は新型コロナウイルスの感染拡大に配慮して、オンラインでも国内外に配信された。会場には73名、オンラインでは45名（いずれも最大時）の参加者があった。

まず永尾教昭・おやさと研究所長が開会挨拶、次に金子昭・同研究所教授が講師紹介と趣旨説明をおこなった。講義の後、活発な質疑応答がおこなわれ、堀内みどり・同研究所主任が開会の挨拶をおこなった。最後に、宗教学科や同大学同窓会（ふるさと会）などから花束の贈呈があった。

この講義において、私は宗教学や現代哲学などの研究成果をふまえて、天理教人間学が開示する生の根源の地平から、生きることの意味について講演した。本題に入るまえに、自らの宗教研究に言及し、おもに次の三つの研究領域から成っていると述べた。それは天理教学研究（天理教教義学、天理教人間学）、宗教学研究（宗教現象学、意味論）、インド哲学研究（ヴェーダ哲学）である。これらの研究領域は、天理教学研究を基盤として有機的に関連していることにも触れた。

そのうえで、天理教人間学の研究に焦点を絞って、生の意味論的パースペクティブをめぐって論じた。おもな講義内容は、以下のとおりである。

1. 生の意味論的な視座—生の根源の地平から—

天理教原典の言葉に込められた意味を読み解き、生きることの意味を掘り下げて理解するために、意味論的な視座を提示した。意味論的に見れば、ふだん当たり前のように思える事物事象は、社会慣習的な意味コードによって構築されたものである。私たちは文化的に構造化された意味の世界に生きているが、表層的な意味次元から深層的な意味次元に至るまで、言葉の意味の重層性の中に生きている。

私たちの心の地平は、意味論的に存在世界に対応している。心の表層は日常的な存在世界に対応しており、心の深層は非合理的あるいは宗教的な意味世界に対応している。言語哲学者の井筒俊彦も言うように、心が表層から深層へ深まるにつれて、存在の深みが次第に開けていく。宗教哲学者の上田閑照によれば、「地平」には「地平の彼方」が存在する。心の地平の彼方へといざなわれるのは、日常的な価値判断や常識がほとんど通用しないような出来事、すなわち、「ふし（節）」に出会ったときである。「おさしづ」には、「ずつない事はふし、ふしから芽を吹く。」（明治27年3月5日）と論されている。ここで「ふし」の語はメタファー（たとえ）である。

哲学者のポール・リクールが言うように、メタファーは「間接的で暗示的で暗黙の仕方ながら、私たちになじみの環境との

日常的な関係がまさに隠しているものを、思いきって言おう」（『生きた隠喩』岩波書店）とする。「ふしから芽を吹く」という隠喩的表現は極めて含蓄深い。たとえば、竹や木には節があるので、竹や木は風雨にも強いし、節から次々と新しい芽が吹き出して、竹や木が次第に大きくなっていく。それと同じように、私たちはさまざまな「ふし」に出会うとき、心のあり方をとらえなおし、「陽気ぐらし」という本来的なあり方を自覚する機会を与えられる。

2. 生きていることの意味とその深み

天理教のコスモロジー（人間観・世界観）によれば、私たち人間は二重の「生のつながり」において生きている。垂直次元では、親神と人間が「をやと子」の人格的呼応関係にあり、水平次元では、私たち人間は親神を「をや」と仰ぐ一れつ（きょうたい）の姉妹の関係にある。この二重の「生のつながり」において、私たちは親神の守護によって生かされて生きている。二重の生のつながりが有機的に連関し合って、存在世界全体が構成されている。

私たちが心の「ほこり」（自己中心的な心遣い）を払って、心を澄ますと、心の地平が次第に深化していく。「おさしづ」には、「どうせこうせこら言わんこれ言えん。言わん言えんの理を聞き分けるなら、何かの事も鮮やかと言う。それ人間という身の内という、皆神のかしもの・かりもの、心一つが我がの理。」（明治23年4月4日補）と論される。原典の言葉が開示する生の意味の深みを理解するには、「言わん言えんの理を聞き分ける」ことが肝心である。それは私たちの身体が親神からの「かりもの」であり、心だけが自分のものであるとの「かしのもの・かりもの」の教理である。

3. 「かしのもの・かりもの」の教理—生きることの意味を理解するために—

生の意味の深みを開くには、「かしのもの・かりもの」の教理の理解が不可欠である。この教理に込められた意味の深みを心底から理解するとき、「言わん言えんの理を聞き分ける」ことができる。私たちの身体が「ほんになる程、かりものにちがひないと、理をかんじる」（『正文遺韻抄』）ことができる。ここで、一つの具体例として松村吉太郎（1867～1952）という先人の逸話を取り上げた。松村は26歳で激しい赤痢にかかり、生死の境を彷徨ったとき、教祖の直弟子の一人、榊井伊三郎が松村を見舞いに訪れた。榊井は言った、「松村さん。心がたおれたら身がたおれる。心が死ねば身上も死ぬ。心が生きたら身上は生きるのや。身上は神様からの借物や、何も案じることいらん…。松村は「その短かい言葉が、ピーンと胸にひびいた。もう何年という間、耳がたこになるほど聞いたお話だ。（中略）今日ばかりは『そうだ、たしかにそうだ！』と思えた」（松村吉太郎自伝『道の八十年』養徳社）。この逸話は教理の知的理解ばかりでなく、教理を心に感じとることの大切さを端的に物語っている。

この道の信仰を理解するには、原典の言葉に込められた意味の深みを理解することが肝心である。原典の言葉には、日常言語の意味のうえに、いわば「意味の重ね書き」がなされている。原典の意味の深みを理解する心の地平を開くところに、生きることの意味を理解できることになる。そこに「皆んな勇ましてこそ、真の陽気という」と教えられる、私たち人間の本来的な生き方を実践できるようになっていく。

第 346 回研究報告会 (2022 年 3 月 14 日)

「ブォの儀礼と伝承」

アルタン・ジョラー

ホルチン・モンゴル (内モンゴル自治区) には、ブォと呼ばれるシャーマンの人物たちが存在し、病気治療をはじめ様々な儀礼実践を行っている。

今回の発表では、ブォの儀礼用具 (衣装・道具・偶像) と、それらの用具を用いた儀礼の諸相、そしてブォの伝承の実態に

ついて紹介した。なお、ブォの儀礼は身体的実践であるため、身体表現、儀礼の様相や場の雰囲気などを画像・映像資料を用いて説明することにした。

シャーマニズムを含めた呪術-宗教的儀礼と伝承は、時代に影響されつつ社会的な役割を果たしている。同時に、そのような儀礼と伝承は語られる世界観のみならず、当事者の身心経験とも直に関わっていると考えられる。以上のことがブォへの調査において浮かび上がってきた。身心経験と世界観との関係性については、さらなる調査研究が必要とされる。

2022 年度公開教学講座のご案内

— 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ (8) —

2022 年度の公開教学講座は、以下の日程で、昨年度と同様にオンラインでの配信を予定しております。ただし、状況に応じて、対面での開催も検討いたします。

- | | |
|------------|------------------|
| 第 1 回 5 月 | 永尾教昭所長 |
| | 151 話「をびや許し」 |
| 第 2 回 6 月 | 澤井真研究員 |
| | 111 話「朝、起こされるのと」 |
| 第 3 回 9 月 | 岡田正彦研究員 |
| | 139 話「フラフを立てて」 |
| 第 4 回 10 月 | 八木三郎研究員 |
| | 108 話「登る道は幾筋も」 |
| 第 5 回 11 月 | 森洋明研究員 |
| | 119 話「遠方から子供が」 |
| 第 6 回 1 月 | 堀内みどり主任 |
| | 126 話「講社のめどに」 |

2021 年度「教学と現代」

去る 2 月 25 日に開催された澤井義次天理大学名誉教授の最終講義「生きることの意味とその理解—天理教人間学の地平から—」をオンラインで配信しています。研究所ホームページよりご視聴ください。

2021 年度公開教学講座

— 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ (7) —

- | | |
|-------|-----------------|
| 第 1 回 | 永尾教昭所長 |
| | 110 話「魂は生き通し」 |
| 第 2 回 | 金子昭研究員 |
| | 127 話「東京々々、長崎」 |
| 第 3 回 | 尾上貴行研究員 |
| | 130 話「小さな埃は」 |
| 第 4 回 | 澤井治郎研究員 |
| | 138 話「物は大切に」 |
| 第 5 回 | 島田勝巳研究員 |
| | 123 話「人がめどか」 |
| 第 6 回 | 澤井義次研究員 |
| | 115 話「おたすけを一条に」 |

グローバル天理

第 23 巻 第 5 号 (通巻 269 号)

2022 年 (令和 4 年) 5 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 永尾教昭

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒 632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan